vol. 2349

【発　行】大分県高等学校教職員組合教宣部　大分市大字下郡496-38　大分県教育会館
TEL／(097) 556-2838　FAX／(097) 556-8998　MAIL／ohtwu@view.ocn.ne.jp

大分県高教組情報

【発行者】大野　真二　【印　刷】(株) 佐伯コミュニケーションズ　【売　価】30円(組合員の購読料は組合費の中に含んで徴収しています)

学校にも働き方改革の風を

- 被爆81周年原水爆禁止世界大会・広島大会　参加報告
- ～「ゆたかな学び」を保障する教育をいかに実現するか～
  日教組九州地区協議会　第68回「教育運動交流集会」 第42回「カリキュラム編成講座」
- 第53回日教組九州地区協議会障害児教育部学習会　参加報告
- 中津支部教研　実施報告　●福島震災・原発災害フィールドワーク　参加報告
- さようなら原発9.23全国集会　参加報告

＊＊

被爆81周年 原水爆禁止世界大会・広島大会 参加報告

とき：8月4～5日（火～水）　ところ：広島県

「被爆81周年原水禁世界大会・広島大会」に大分県平和運動センターから７人が参加しました。

４日午後、平和記念公園を出発し、開会行事の会場である広島県立体育館までの「折り鶴行進」に参加しました。距離は２km弱でしたが、日中の最高気温が35℃をこえ夕刻まで続く暑さの中、多数の参加者の行進は小一時間かかって、広島の繁華街で反核のアピールを行いました。開会行事では、まず被爆ピアノの演奏から、主催者あいさつ、記念講演として、一般的に原爆資料館と呼ばれている「広島平和記念資料館」で1997年から2006年まで館長を務めた畑口実さんが、ご自身の被爆体験を語られました。「被爆体験は話したくなかったし、被爆手帳も交付されたけど使わなかった」そうです。広島市役所に採用後も、その思いは続いていたけれど、館長の辞令をもらってからは、被爆体験を伝えるのが自分の使命と思い、特に外国の政治家への説明は被爆者を代表するつもりでとりくんで来られたということでした。

５日は、「平和と核軍縮Ⅱ－日本国内の情勢2006」分会に参加しました。沖縄先島の軍事基地化や、諸外国に対する有識者の訴えかたなどがリポートされました。知らなかったことが多く、自分の学習にはつながるのですが、それをどのように伝えるのかが課題です。あわせて、各種の集会で常々思っていることですが、一般参加者の発言で、熱い思いを持っていることは伝わるけれど、思いが先走って予備知識のない者には何のことか伝わらない話だったり、やたらと長い話になったりすることが多いのが、今回も残念でした。

（高教組本部　大野真二）

～「ゆたかな学び」を保障する教育をいかに実現するか～

日教組九州地区協議会
第68回「教育運動交流集会」
第42回「カリキュラム編成講座」

とき：８月16～17日（日～月）　ところ：佐賀市　四季彩ホテル千代田館

基調報告で平和・民主主義の危機、改憲阻止に向けた勢力の結集等を確認した後、自由学園最高学部の桜井智恵子さんが「教育は社会をどう変えたのか」と題して講演しました。桜井さんは、「子どもの問題は経済の問題」「『子どもの最善の利益』＝戦争をしない、といったコルチャックの問題意識が大事」「学校における環境の整備とは、これ以上『取組』を上乗せすることではなく、減らすことです。余裕無しに安心な関係は生まれません」「低所得層の社会的状況を横に置いて、教育の福祉化が進み、貧困に対し学校が主体でケアを行っていくのは、資本主義社会を支える論理に組み込まれていきます」などと指摘されました。

分科会では、別府翔青分会の髙橋貴子さんが「コーディネーターから１/３校長へ」と題してリポート報告をしました。

（教文部長　後藤恵美）

佐賀市で行われた日教組九州地区協議会第68回「教育運動交流集会」の「現場からの教育改革」分科会に参加し、別府翔青高校の髙橋貴子さんと宮崎高教組の友納総一朗さんの報告を拝聴しました。

髙橋さんの報告では、学年主任としての苦労とともに、これまでの教育相談の経験や研鑽をもとに独自のカラーを工夫されている姿が大いに参考になりました。また、友納さんはこれまでの部活動指導の経験をもとに変革期にある部活動の未来を語られました。並行して現在の義務制のインクルーシブ教育の現状も義務制の先生方から提示され、その多様化と多忙化に驚きました。

高教組活動だけではなかなか理解できない義務制の現状や課題は、いずれ高校現場にも表れてきます。このような集会に参加することで、それを認識できることがたいへん貴重な学習でした。

（杵築分会　加藤博晴）

今回の大会に参加し、教育の課題を個人や学校、家庭の責任だけでなく、その背景にある社会のあり方から捉えることの重要性を改めて考えさせられた。全体会の講演では、子どもの幸せを願うはずの教育が、成果を求める社会の中で、逆に子どもを追い詰めている現状が指摘されたことが特に印象に残った。

「学校づくり･地域づくり」の分科会では、廃校となった地域を訪れ、ヒト・モノ・コトとの出会いを通して学ぶ大分県の小学校の実践から、子どもたちが地域に足を運ぶこと自体が、人々をつなぎ、地域を元気にする力になると感じた。また、福岡県の支援学校の報告では、在籍児童生徒の増加や教職員不足、児童生徒・保護者との対話の重要性について議論した。

全体会での指摘や分科会で報告された実践の背景には、教育を支える人員と予算の不足という大きな課題がある。だからこそ、個人の努力だけに委ねるのではなく、教育を大切にする社会と政策をつくるため、組合として声を上げ続けることの重要性を再認識した大会となった。

（別府鶴見丘分会　園田克典）

2015年からとりくんできた課題について深く議論でき、他県の先生方のあたたかい言葉に勇気をもらった。一方で九州内の現状を知り、本県の高校におけるインクルーシブ教育や通級指導の遅れを痛感した。特に宮崎県では半数以上の高校で通級指導が実施されており、支援体制の差に驚かされた。個別指導はもちろん重要だが、現場の負担感を考えると、学年全体で「どのような力を伸ばすか」の共通理解を持ち、組織的に指導する方が個の成長につながるのではないかと感じた。

道中に読んだ工藤勇一＆青砥瑞人著『自律する子の育て方』を胸に、「安心して失敗できる場の提供」「対話力の向上」「メタ認知能力の育成」を意識した教育を実践していきたい。

（別府翔青分会　髙橋貴子）

第53回
日教組九州地区協議会障害児教育部学習会 参加報告

とき：８月18～19日（火～水）　ところ：長崎市

８月18・19日、長崎市で開催された第53回九協障害児教育部学習会に参加した。

１日目の講演では、ながさき自立生活センターこころ代表の山口和俊さんから、「インクルーシブな学校がインクルーシブな社会をつくる」をテーマに、地域の学校で学んだ経験や現在の自立生活を通して、合理的配慮や障がいの社会モデルについて、知見を得ることができた。また、分散会では、もう学校の現状や課題について各県の代表者と意見交換を行うことができた。

２日目は、第１分科会「職場の民主化」で、「視覚障がいを持つ理療科教員の働き方改革」を報告した。生成AIによって文書作成や教材研究などの負担を軽減できる一方、AIだけですべてを解決するのではなく、人による支援や合理的配慮との適切な組み合わせが重要であることを提起した。

各県からの実践報告や意見交換を通して、インクルーシブな教育の実現には、子どもだけでなく教職員一人ひとりが尊重され、互いに声を出し合える職場づくりが欠かせないことを改めて考える機会となった。

学習会で得られた知見や人との出会いが組合の核となる部分ではないかと考える。学習を通じて、今後も組合の良さを周囲へ伝えていきたい。

（もう分会　末永多香光）

中津支部教研　実施報告

とき：9月5日（土）　ところ：中津北高校北高会館

中津支部教研は、９月５日土曜日の午前中に北高会館で実施されました。16人の組合員が参加しました。今回は、元大分県平和運動センター議長の山本新彦（よしひこ）さんにご講演いただきました。組合員でも、平和運動センターの成立経緯や果たしている役割など、理解できてない部分もあるかと思い、中津地区平和運動センターの髙松事務局長のご協力もあって、山本さんにお話ししていただける機会を得ました。

演題は「我が事として」です。山本さんは県教組の書記長・執行委員長を合わせて９年務められ、その時期に大分県平和運動センターの議長を６年間担われました。お話では、教育労働運動の中での平和運動のとりくみの経緯と意義を、終戦直後の情勢から説き起こされました。1946年の終戦直後の文部省の新教育指針には、「教員組合」の団結で政党の介入に抗い教育と政治を正しい方向に導くべしと書かれていることから、87年の労線統一（連合誕生）の流れの中でも、県労評運動が大切にしてきた「共闘」と「反戦」・「反差別」・「反核」等のとりくみが「平和運動センター」に継承されてきたことまで、戦後から80年代までの政治状況と、教職員組合が平和運動としてとりくんできたことの数々を伺いました。共闘活動については、具体的な中津地区での事例も伺いました。現在は、健全な教育ではなく、時の政府の方針を是とすることしか教育できない状況に向かっているのでは、との危機感を強くしました。今起きている教育への介入を「我が事」としてとらえ、声を上げないと、かつて通った道を再び歩むこととなるかもしれません。

土曜日でも各校・組合員それぞれに部活動やスポーツ活動との関わり、学校行事や模試の実施などありましたが、その中でも「貴重な学習機会を得た」など実施後の感想は教研活動に前向きなものばかりでした。今回は地域の労働運動共闘の先達の貴重なお話を伺えました。今後も高教組の教育研究集会が、平和や教育の意義を考え実感する機会となることを念じます。

（中津東定時制分会　沼田庄司）

福島震災・原発災害フィールドワーク参加報告

とき：９月５～６日（土～日）　ところ：福島県

復興半ばの福島の実情を全国の仲間に知ってほしいという思いから、福島県教組が企画し日教組各単組に呼びかけたフィールドワークに参加することができました。東日本大震災・原子力災害の被災地を訪れ、今なお残る爪痕と、私たちが備えるべき教訓について学びました。大波小学校では、放射線による転校で６年生１人となった末に廃校となったことや、浪江小学校では、教職員の迅速な判断により児童全員が山へ避難し、命を守り抜いたことを知り、自分も生徒を守れるようになりたいと思いました。さらに、東日本大震災・原子力災害伝承館の展示や映像を通し、家族との別れや放射能検査の不安、私物を持ち帰れない被災者の深い苦悩を痛感しました。

原子力の便利さの裏にある予測不能な災害の危うさを知り、「災害はいつでもどこでも起きる」という前提に立ち、子どもたちの命を守るための備えを徹底していかなければならないと強く感じました。

福島の現状や自分の考えを見直すよい機会となりました。

（高教組本部　河野淳平）

震災遺構　旧浪江小学校（浪江町）

津波の爪痕の残る校舎内

東日本大震災　原子力災害伝承館（双葉町）

さようなら原発9.23全国集会　参加報告

とき：９月23日（水、休）　ところ：代々木公園

標題の会およびその前段の「進む軍事力強化に反対する全国集会」に参加してきました。あいにくの雨でしたが、主催者発表で全国から４,000人集まり、平和への思いを新たにしました。メインスピーチは国際交流NGOピースボート共同代表の畠山澄子さんが行い、特に「各市町村で再生可能エネルギーを導入・推進するところが増えている。電力を地域に取り戻す時である」「戦争、原発、気候危機は持続可能でないし、必ず不正義、不条理がある。危険や犠牲を未来に押しつけるのではなく、次の世代が安心して暮らせる社会を作りたい」との言葉が印象に残りました。

その後、原宿の中心部を約１時間デモ行進し、原発反対や再エネ推進、福島を忘れないことなどを訴えました。全国の仲間とともに行動することで、前段の会の最後に出た言葉、「明日の天気は変えられないが、明日の社会は変えることができる」を強く実感することができました。

（大分工業定時制分会　竹本哲也）

お知らせ

○書記の但馬智恵美さんが10月末でご退職されます。長い間おつかれさまでした。
○新たに、柴田真奈さんが10月から書記として勤務しています。

教宣部より

○写真・感想等、提供してくださった皆様、ありがとうございました。今後も、行事に参加された方は、写真・感想等をメールにて提供くださいますよう、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。
文章は400字程度でお願いします。
○各支部･単組･専門部･分会等での活動等も広報したいと思います。交流会や学習会等についても、写真･記事などを、ぜひご提供ください。
※写真はスマホ撮影のものでも大丈夫です。肖像権にはご留意ください。